

〈序〉

私が海外へ出かけたときに痛切に感じることは石造建築物の多いことであり、それが何百年もの風雪に耐えて現存していることである。舗装も何百年、いや千年以上もの昔に馬車交通や牛車交通の時代に造られたものが、そのまま使われていることに教えられるものがあった。また、橋梁も石造アーチ橋として1,200年以上もの昔のものが未だに使われているのにはびっくりした。これら建築物や橋梁は昔の文化を残すように、機能だけではなく周囲に調和してデザインしていることにもつくづく感心させられた。

これに反して、日本の構造物は家屋を中心として木造が多く、寿命が短い。橋梁にしても永久橋と称している鉄筋コンクリート橋にしても鋼橋にしても寿命は50～70年ぐらいのもので、永くても100年ほまたない。石造アーチ橋に比べたら問題とはならない。日本人は豊かになっても豊かさを実感がないのは、これらの社会資本の寿命が短く、これらに投資することに追われるからである。

わが国には地震があり、石材の材質があまり良くないというハンディがある。しかし、私が国連大学の研究員として、九州地方に残されている石造アーチ橋の調査で石造文化を勉強する機会に恵まれて、わが国でももっと石造構造物を用いてもよいのではないかと考えるようになった。

本書は海外56か国に旅した経験から得た外国の石造文化を紹介するとともに、石造アーチ橋が九州で発達しながら、明治維新のときに導入された西洋文明に惑わされて、石造アーチ橋の建設が昭和初

期に途絶えてしまったことを中心として、石造の文化を紹介するものである。今後、石造アーチ橋や歩道舗装のほか、ストリートファニチャーなどに石材が用いられることを願ってやまない。

本書を纏めるに当たっては多くの方々のご協力を戴き、とくに国立大分高専の亀野辰三助教授には多大のご支援を戴いた。また、多くの図書や文献を参考にさせて戴いた。一部の方にはお目にかかってご了解を戴いたが、その他の方々には、参考文献一覧表として巻末に纏めて掲載し、必要あるときにはりのように参考文献番号を付けて出典を明示した。なお、専門書としては拙著「土木の歴史」「日本の土木遺産」（森北出版）があるので、これを参考にして戴きたい。

平成9年4月

著者 しるす